

一最上峡の神々と伝説

1 最上の五明神

最上峡にまつわる古い伝説の一つに「最上の五明神」の伝説がある。

大和時代のことであるという。時の天皇、景行天皇は皇子、日本武尊を東国に遣わして、未だ天皇に服従しない蝦夷を征服しようとした。尊は天皇の命を奉じて東国に入り、方々で苦しい戦いを交わした後出羽国に入り、最上川を下って庄内地方に進もうとした。しかし、古口に至って、はたと困った。いままで満々たる水をたたえて悠々と流れていた最上川がここで急に狭くなり、岩を喰む激流となって、舟の航行を拒んでいるのである。それでは、岸边の山の路を、とみると、兩岸は水際から頭が雲に隠れるほどの高山が峨々として聳えていて、到底人など通れそうもない。

さて、どうすべきか。尊は家来たちを集めて、川の路を選ぶべきか、それとも陸の道を選ぶべきかを相談した。家来たちの協議は議論百出、容易に決まらなかったが、結局は川より他にないとして、その準備を進めた。しかし、一人の武将は頑強に反対し、あくまでも山路を進むべしと言い張って譲らなかった。

やがて、尊らは舟を下したが、彼の武将は鎧・兜をつけたまま川に飛び込み、淵に棲む竜の明神に尊の武運を祈りつつ、矢のように下る尊の舟を追った。途中、彼は川の中では邪魔とて、着ていた鎧・兜を脱ぎ捨て、尚も尊の舟を追ったが、ついに流れに足をとられ、波の間に消えてしまった。

現在、最上峡の岸边に祀られている「甲の明神」、「鎧の明神」は彼の武将がこのとき脱ぎ捨てた兜・鎧を祀ったものという。この二明神に竜の明神と仙人堂及び本合海の矢向神社の三明神を加えた五明神を「最上の五明神」と呼び、庄内地方ではごく最近まで巫女が神付けを行う場合、まず初めにこの五明神を呼び出すのが例であったという。

ところで、現在、この五明神のうち、甲の明神及び矢向神社・仙人堂の三明神を除く、他の二明神の所在は明らかでない。これが明らかでないのは昨日・今日のことではなく、すでに、江戸時代前期頃から所在はあいまいになっていたようである。即ち、享保末年頃、新庄藩士田口五左右衛門が著した「新庄古老覚書」巻之六に、

義経記に見候鎧の明神、甲の明神の事を古口村の者に尋ね候へば今古跡有之候由、鎧の明神は古口村の下土湯村にて白滝の間にて河の北にあり、今は杜も無く杉木立少々有之候迄

也。甲の明神は夫より半里余り上に杳喰村と云う村有、其村の向ひ河の南山の麓に二間程の沼あり、此沼の辺に古の甲の明神御建候と中迄にて是も今は杜の形も無し

とある。

しかし、五明神の中の「甲の明神」、「鎧明神」の二社は、古くからこの地方の名社としてうたわれていたようで、すでに室町時代の作という「義経記」に記されており、また、右に記したように江戸前期、享保末年の著「新庄古老覚書」にもあり、さらに、江戸中期宝暦頃編の「新庄領村鑑」「古口村・堂社」の項に「甲明神 杳喰 同 竪七間横五間」、「鎧明神 上湯 同 竪十間横八間」とあり（竪・横は各社境内地の縦横。筆者註）、さらに、天明八年（一七八八）、幕府巡見使に扈從して出羽国に下った地理学者古河古松軒の紀行文「東遊雑記」にも、この名は記されている。これらの書には、それぞれの杜の由緒は記されていないが、恐らくは前に記したような伝承とともに広く人々の間に伝え継がれてきたものと思われる。